

国

語

(  
解答番号

1

)

35

(

## 第1問

次の文章は、近年さまざまな分野で応用されるようになった「レジリエンス」という概念を紹介し、その現代的意義を論じたものである。これを読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。なお、設問の都合で本文の段落に①～⑭の番号を付してある。(配点 50)

① 環境システムの専門家であるウォーカーは、以下のような興味深い比喩を持ち出している。

② あなたは、港に停泊しているヨットのなかでコップ一杯の水を運んでいるとしよう。そして、同じことを荒れた海を航海しているときに行つたとしよう。港に停泊しているときにコップの水を運ぶのは簡単である。この場合は、できるだけ早く、しかし早すぎないように運ばよいのであって、その最適解は求めやすい。しかし、波風が激しい大洋を航海しているときには、早く運べるかどうかなど二の次で、不意に大きく揺れる床の上で転ばないでいることの方が重要になる。あなたは、膝を緩め、突然やってくる船の揺れを吸収し、バランスをとらねばならない。海の上での解は、妨害要因を吸収する能力を向上させることをあなたに求める。すなわち、波に対するあなたのレジリエンスを向上させることを求めるのである。

③ この引用で言う「レジリエンス(resilience)」とは、近年、さまざまな領域で言及されるようになった注目すべき概念である。この言葉は、「攪乱を吸収し、基本的な機能と構造を保持し続けるシステムの能力」を意味する。

④ レジリエンスの概念をもう少し詳しく説明しよう。レジリエンスは、もともとは物性科学(注1)のなかで物質が元の形状に戻る「弾性」のことを意味する。六〇年代になると生態学や自然保護運動の文脈で用いられるようになった。ここでは、生態系が変動と変化に対して自己を維持する過程という意味で使われた。しかし、ここで言う「自己の維持」とは単なる物理的な弾性のことではなく、環境の変化に対して動的にに応じていく適応能力のことである。

5 レジリエンスは、回復力(復元力)、あるいは、サステナビリティと類似の意味合いをもつが、<sup>(注2)</sup> A そこにある微妙な意味の

違いに注目しなければならぬ。たとえば、回復とはあるベースラインや基準に戻ることを意味するが、レジリエンスでは、かならずしも固定的な原型が想定されていない。絶えず変化する環境に合わせて流動的に自らの姿を変更しつつ、それでも目的を達成するのがレジリエンスである。レジリエンスは、均衡状態に到達するための性質ではなく、発展成長する動的過程を<sup>(ア)</sup>ソクシンするための性質である。

6 また、サステナビリティに関して、たとえば、「サステナブルな自然」といったときには、唯一の均衡点が生態系のなかにあるかのように期待されている。しかしこれは自然のシステムの本来の姿とは合わない。レジリエンスで目指されているのは、ケン<sup>(イ)</sup>コウなダイナミズム<sup>(注3)</sup>である。レジリエンスには、適度な失敗が最初から包含されている。たとえば、小規模の森林火災は、その生態系にとって資源の一部を再構築し、栄養を再分配することで自らを更新する機会となる。こうした小規模の火災まで防いでしまうと、森林は燃えやすい要素をため込み、些<sup>ささ</sup>細な発火で破滅的な大火災にまで発展してしまう。

7 さらに八〇年代になると、レジリエンスは、心理学や精神医学、<sup>(注4)</sup>ソーシャルワークの分野で使われるようになった。そこでは、ストレスや災難、困難に対処して自分自身を維持する抵抗力や、病気や変化、不運から立ち直る個人の心理的な回復力として解釈される。

8 たとえば、<sup>(注5)</sup> フレイザーは、ソーシャルワークと教育の分野におけるレジリエンスの概念の重要性を主張する。従来は、患者の問題を専門家がどう除去するかという医学中心主義的な視点でソーシャルワークが行われていた。患者の問題の原因は患者自身にあるとされ、患者を治療する専門家にケアの方針を決定する<sup>(ウ)</sup>ケンゲンが渡された。こうして患者は医師に依存させられてきた。これに対して、レジリエンスに注目するソーシャルワークでは、患者の自発性や潜在能力に着目し、患者に中心をおいた援助や支援を行う。

9 フレイザーのソーシャルワークの特徴は、人間と社会環境のどちらかではなく、その間の相互作用に働きかけることにあり<sup>(注6)</sup>。クライアントの支援は、本人の持つレジリエンスが活かせる環境を構築することに焦点が置かれる。たとえば、発達障害

のある子どもに対して、特定の作業所で務められるような仕事をどの子どもにも同じように教えることは妥当ではない。そうすると身につけられる能力が<sup>(エ)</sup>カタヨって特定の作業所に依存してしまい、学校から作業所へとという流れの外に出ることができなくなる。それでは一種の隔離になる。子どもの潜在性に着目して、職場や環境が変わっても続けられる仕事につながるような能力を開発すべきである。

10 B ここでレジリエンスにとつて重要な意味をもつのが、「脆弱性(vulnerability)」である。通常、脆弱性はレジリエンスとは正反対の意味を持つと考えられている。レジリエンスは、ある種の<sup>(オ)</sup>ガケンさを意味し、脆弱性とは回復力の不十分さを意味するからである。しかし見方を変えるなら、脆弱性は、レジリエンスを保つための積極的な価値となる。なぜなら、脆弱性とは、変化や刺激に対する敏感さを意味しており、このようなセンサーをもったシステムは、環境の不規則な変化や攪乱、悪化にいち早く気づけるからである。たとえば、災害に対して対応力に富む施設・建築物を作り出したのなら、障害者や高齢者、妊娠中の女性にとつて避難しやすい作りになることが最善の策となる。

11 さらに、近年のエンジニアリング<sup>(注7)</sup>の分野においては、レジリエンスは、安全に関する新しい発想法として登場した。レジリエンス・エンジニアリングとは、複雑性を持つ現実世界に対処できるように、適度な冗長性<sup>(注8)</sup>を持ち、柔軟性に富んだ組織の能力を高める方法を見いだすものである。エンジニアリングの分野では、レジリエンスは、環境の変化に対して自らを変化させて対応する柔軟性にきわめて近い性能として解釈される。

12 以上のように、レジリエンスという概念に特徴的なことは、それが自己と環境の動的な調整に関わることである。回復力とは、システムどうしが相互作用する一連の過程から生じるものであり、システムが有している内在的性質ではない。レジリエンスの獲得には、当人や当該システムの能力の開発のみならず、その能力に見合うように環境を選択したり、現在の環境を変えたりすることも求められる。レジリエンスは、複雑なシステムが、変化する環境のなかで自己を維持するために、環境との相互作用を連続的に変化させながら、環境に柔軟に適応していく過程のことである。

13 レジリエンスがこうした意味での回復力を意味するのであれば、<sup>(C)</sup>それをミニマルな福祉の基準として提案できる。すな

わち、ある人が変転する世界を生きていくには、変化に適切に応じる能力が必要であつて、そうした柔軟な適応力を持てるようにすることが、福祉の目的である。福祉とは、その人のニーズを充足することである。ニーズとは人間的な生活を送る上で必要とされるものである。ニーズを充足するには他者から与えられるものを受け取るばかりではなく、自分自身でそのニーズを能動的に充足する力を持つ必要がある。そうでなければ、自律的な生活を継続的に送れないからである。

14 レジリエンスとは、自己のニーズを充足し、生活の基本的条件を維持するために、個人が持たねばならない最低限の回復力である。人間は静物ではなく、生きている。したがって、傷ついて、病を得て、あるいは、脆弱となつて自己のニーズを満たせなくなつた個人に対してケアする側がなすべきは、物を修復するような行為ではないし、単に補償のための金銭を付与することでもない。物を復元すること、生命あるものが自己を維持することとはまったく異なる。生命の自己維持活動は自発的であり、生命自身の能動性や自律性が要求される。したがって、ケアする者がなすべきは、さまざまに変化する環境に対応しながら自分のニーズを満たせる力を獲得してもらふように、本人を支援することである。

(河野哲也『境界の現象学』による)

(注) 1 物性科学——物質の性質を解明する学問。  
2 サステナビリティ——持続可能性。「サステナビリティ」と表記されることも多い。後出の「サステナブルな」は「持続可能な」の意。

- 3 ダイナミズム——動きのあること。
- 4 ソーシャルワーク——社会福祉事業。それに従事する専門家が「ソーシャルワーカー」。
- 5 フレイザー——マーク・W・フレイザー(一九四六—)。ソーシャルワークの研究者でレジリエンスの提唱者。
- 6 クライアント——相談者、依頼人。「クライアント」ともいう。
- 7 エンジニアリング——工学。
- 8 冗長性——ここでは、余裕を持たせておくこと。

問1 傍線部(ア)～(オ)に相当する漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

1  
5

(ア) ソクシン

1

⑤ ④ ③ ② ①

組織のケツソクを固める  
距離のモクソクを誤る  
消費の動向をホソクする  
自給ジソクの生活を送る  
返事をサイソクする

(ウ) ケンゲン

3

⑤ ④ ③ ② ①

マラソンを途中でキケンする  
ケンゴな意志を持つ  
ケンジを晴らす  
実験の結果をケンシヨウする  
セイリヨクケンを広げる

(オ) ガンケン

5

⑤ ④ ③ ② ①

タイガンまで泳ぐ  
環境保全にシュガンを置く  
ドリルでガンバンを掘る  
勝利をキガンする  
ガンキョウに主張する

(イ) ケンコウ

2

⑤ ④ ③ ② ①

シヨウコウ状態を保つ  
賞のコウホに挙げられる  
大臣をコウテツする  
コウオツつけがたい  
ギコウを凝らした細工

(エ) カタヨって

4

⑤ ④ ③ ② ①

雑誌をヘンシユウする  
世界の国々をヘンレキする  
凶書をヘンキヤクする  
国語のヘンサチが上がった  
体にヘンチヨウをきたす

問2 傍線部A「そこにある微妙な意味の違い」とあるが、どのような違いか。その説明として最も適当なものを、次の①～

⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 6。

- ① 回復力やサステナビリティには基準となるベースラインが存在しないが、レジリエンスは弾性の法則によって本来の形状に戻るといふ違い。
- ② 回復力やサステナビリティは戻るべき基準や均衡状態を期待するが、レジリエンスは環境の変化に応じて自らの姿を変えていくことを目指すといふ違い。
- ③ 回復力やサステナビリティは環境の変動に応じて自己を更新し続けるが、レジリエンスは適度な失敗を繰り返すことで自らの姿を変えていくといふ違い。
- ④ 回復力やサステナビリティは生態系の中で均衡を維持する自然を想定するが、レジリエンスは均衡を調整する動的過程として自然を捉えるといふ違い。
- ⑤ 回復力やサステナビリティは原型復帰や均衡状態を目指すが、レジリエンスは自己を動的な状態に置いておくこと自体を目的とするといふ違い。

問 3

傍線部B「**脆弱性**」でレジリエンスにとって重要な意味をもつのが、『脆弱性(vulnerability)』である。」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 7。

① 近年のソーシャルワークでは、人の自発性や潜在能力に着目して支援を行う。そのとき脆弱性は、被支援者が支援者にどれだけ依存しているかを測る尺度となるため、特定の人物に過度の依存が起らない仕組みを作るにあたって重要な役割を果たすということ。

② 近年のソーシャルワークでは、環境に対する抵抗力の弱い人々を支援する。そのとき脆弱性は、変化の起こりにくい環境に変化を起こす刺激として働くため、障害者や高齢者といった人々が周囲の環境の変化に順応していく際に重要な役割を果たすということ。

③ 近年のソーシャルワークでは、被支援者の適応力を活かせるような環境を構築する。そのとき脆弱性は、環境の変化に対していち早く反応するセンサーとして働くため、非常時に高い対応力を発揮する施設や設備を作る際に重要な役割を果たすということ。

④ 近年のソーシャルワークでは、人間と環境の相互作用に焦点を置いて働きかける。そのとき脆弱性は、周囲の変化に対する敏感なセンサーとして働くため、人間と環境の双方に対応をうながし、均衡状態へと戻るための重要な役割を果たすということ。

⑤ 近年のソーシャルワークでは、人と環境の復元力を保てるように支援を行う。そのとき脆弱性は、人の回復力が不十分な状態にあることを示す尺度となるため、障害者や高齢者などを支援し日常的な生活を取り戻す際などに重要な役割を果たすということ。



問4 傍線部C「それをミニマルな福祉の基準として提案できる」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当な

ものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 8。

- ① 個人が複雑な現実世界へ主体的に対応できるシステムを、福祉における最小の基準とすることができる。これに基づいて、支援者には被支援者が主体的に対応できるよう必要な社会体制を整備することが求められるということ。
- ② 個人がさまざまな環境に応じて自己の要求を充足してゆく能力を、福祉における最小の基準とすることができる。これに基づいて、支援者には被支援者がその能力を身につけるために補助することが求められるということ。
- ③ 個人が環境の変化の影響を受けずに自己のニーズを満たせることを、福祉における最小の基準とすることができる。これに基づいて、支援者には被支援者が自己のニーズを満たすための手助けをすることが求められるということ。
- ④ 個人が環境の変化の中で感じたニーズを満たすことを、福祉における最小の基準とすることができる。これに基づいて、支援者には被支援者のニーズに添えて満足してもらえよう尽力することが求められるということ。
- ⑤ 個人が生活を維持するための経済力を持つことを、福祉における最小の基準とすることができる。これに基づいて、支援者には被支援者に対する金銭的補償にとどまらず、多様な形で援助することが求められるということ。

問5

次に示すのは、本文を読んだ後に、三人の生徒が話し合っている場面である。本文の趣旨を踏まえ、空欄に入る発言として最も適当なものを、後の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

9。

(2101—12)

教師——この文章の主題はレジリエンスでしたね。ずいぶん専門的な事例がたくさん挙げられていましたが、ここで説明されていることを、皆さん自身の問題として具体的に考えてみることはできないか、グループで話し合ってみましょう。

生徒A——最初に出てくるヨットのたとえ話は比較的イメージしやすかったな。ここで説明されていることを、もう少し身近な場面に置きかえてみればいいのか。

生徒B——海の様子だけで船の中の状況も全然違ってくるという話だったよね。環境の変化という問題は私たちにとっても切実だよ。④段落に「自己の維持」と書かれているけど、このごろは、高校を卒業して新しい環境に入っても、今までのように規則正しい生活習慣をしっかりと保ち続けられるかどうか、心配していたところなんだ。

生徒C——そういうことだろうか。この文章では、さまざまに変化する環境の中でどんなふうに向かかっていくか、ということが論じられていたんじゃないかな。⑤段落には「発展成長する動的過程」ともあるよ。こういう表現は何だか私たちのような高校生に向けられているみたいだね。

生徒A——たしかにね。

生徒B——なるほど。「動的」ってそういうことなのか。少し誤解してたけど、よくわかった気がするよ。

- ① 発展とか成長の過程というのは、私は部活のことを考えると納得したな。まったく経験のない競技を始めたけど、休まず練習を積み重ねたからこそ、最後には地区大会で優勝できたんだよ。
- ② 私が部活で部長を引き継いだとき、以前のやり方を踏襲したのにうまくいかなかったんだ。でも、新チームで話し合って現状に合うように工夫したら、目標に向けてまとまりが出てきたよ。
- ③ 授業の時間でも生活の場面でも、あくまで私たちの自由な発想を活かしていくことが大切なんだね。そうすることで、ひとりひとりの個性が伸ばされていくということなんじゃないかな。
- ④ 私たちが勉強する内容も時代に対応して変化しているんだよね。だからこそ、決まったことを学ぶだけでなく、将来のニーズを今から予想しているんなことを学んでおくのが重要なんだよ。
- ⑤ 環境の変化に適応する能力は大事だと思うんだ。同じ教室でも先生が授業している時と休み時間に友達どうしでおしゃべりしている時とは違うのだから、オンとオフは切り替えなきゃ。

問 6 この文章の表現と構成について、次の(i)・(ii)の問いに答えよ。

(i) この文章の表現に関する説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 10。

① 2 段落の最初の文と第2文は「としよう」で終わっているが、どちらの文も仮定の状況を提示することで、読者にその状況を具体的に想像させる働きがある。

② 4 段落の最後の文の「ここで言う」は、直後の語句が他の分野で使われている意味ではなく、筆者が独自に規定した意味で用いていることに注意をうながす働きがある。

③ 6 段落の最初の文の「といったときには」は、直前の表現は本来好ましくないが、あえて使用しているという筆者の態度を示す働きがある。

④ 8 段落の第3文の「あるとされ」は、筆者から患者に対する敬意を示すことで、患者に対しても配慮のある丁寧な文章にする働きがある。

(ii) この文章の構成に関する説明として適当でないものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 11。

① 2 段落では、レジリエンスについて他者の言葉で読者にイメージをつかませ、3 段落では、筆者の言葉で意味を明確にしてこの概念を導入している。

② 5 段落と6 段落では、3 段落までに導入したレジリエンスという概念と、類似する他の概念との違いを詳しく説明し、レジリエンスについての説明を補足している。

③ 4 段落、7 段落、11 段落では、時系列順にそれぞれの時代でどのようにレジリエンスという概念が拡大してきたかを紹介している。

④ 13 段落では、これまでの議論を踏まえ、レジリエンスという概念について一般的な理解を取り上げた後、筆者の立場から反論している。

## 第2問

次の文章は、原民喜「翳」(一九四八年発表)の一節である。これを読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。なお、設問の都合で本文の上に行数を付してある。(配点 50)

私は一九四四年の秋に妻を喪つたが、ごく少数の知己へ送った死亡通知のほかに、満洲にいる魚芳へも端書を差出しておいた。妻を喪つた私は悔み状が来るたびに、丁寧に読み返し仏壇のほとりに供えておいた。紋切型の悔み状であっても、それにはそれでまた喪に在るものの心を鎮めてくれるものがあつた。本土空襲も漸く切迫しかかつた頃のこと、出した死亡通知に何の返事も来ないものもあつた。出した筈の通知にまだ返信が来ないという些細なことも、私にとっては時折気に掛るのであつた。が、妻の死を知つて、ほんとうに悲しみを頒つてくれるだろうとおもえた川瀬成吉からもどうしたものか、何の返事もなかつた。

私は妻の遺骨を郷里の墓地に納めると、再び棲みなれた千葉の借家に立帰り、そこで四十九日を迎えた。輸送船の船長をしていた妻の義兄が台湾沖で沈んだということをきいたのもその頃である。サイレンはもう頻々と鳴り唸つていた。A そうした、暗い、望みのない明け暮れにも、私は凝と蹲つたまま、妻と一緒にすごした月日を回想することが多かつた。その年も暮れようとする、底冷えの重苦しい、曇つた朝、一通の封書が私のところに舞込んだ。差出人は新潟県××郡××村×川瀬丈吉となつている。一目見て、魚芳の父親らしいことが分つたが、何気なく封を切ると、内味まで父親の筆跡で、息子の死を通知して来たものであつた。私が満洲に在るとばかり思つていた川瀬成吉は、私の妻より五ヵ月前に既にこの世を去つていたのである。

私をはじめて魚芳を見たのは十二年前のこと、私達が千葉の借家へ移つた時のことである。私たちがそこへ越した、その日、彼は早速顔をのぞけ、それから殆ど毎日註文を取りに立寄つた。大概朝のうち註文を取つてまわり、夕方自転車(注1)で魚を配達するのであつたが、どうかすると何かの都合で、日に二三度顔を現わすこともあつた。そういう時も彼は気軽に一里(注2)あまりの路を自転車(注1)で何度も往復した。私の妻は毎日顔を逢わせているので、時々、彼のことを私に語るのであつたが、まだ私は何の興味も関心も持たなかつたし、殆ど碌に顔も知つていなかった。

私がほんとうに魚芳の小僧を見たのは、それから一年後のことと云つていい。ある日、私達は隣家の細君と一緒にブラブラと千葉海岸の方へ散歩していた。すると、向の青々とした草原の径を、ゴムの長靴をひきずり、自転車を脇に押しやりながら、ぶらぶらやって来る青年があった。私達の姿を認めると、いかにも懐しげに帽子をとって、挨拶をした。

「魚芳さんはこの辺までやって来るの」と隣家の細君は訊ねた。

「ハア」と彼はこの一寸した逢遭を、いかにも愉しげにニコニコしているのであった。やがて、彼の姿が遠ざかって行くと、隣家の細君は、

「ほんとに、あの人は顔だけ見たら、まるで良家のお坊ちゃんのようなですね」と嘆じた。その頃から私はかすかに魚芳に興味を持つようになっていた。

その頃——と云つても隣家の細君が魚芳をほめた時から、もう一年は隔つていたが、——私の家に宿なし犬が居ついて、表の露次(注4)でいつも寝そべっていた。褐色の毛並をした、その懶惰な雌犬は魚芳のゴムの音をきくと、のそのそと立上つて、鼻さき(注4)を持ちながら自転車の後について歩く。何となく魚芳はその犬に対しても愛嬌(注5)を示すような身振(注6)であつた。彼がやって来ると、この露次は急に賑やかにになり、細君や子供たちが一頻り陽気に騒ぐのであつたが、ふと、その騒ぎも少し鎮まつた頃、窓の方から向を見ると、魚芳は木箱の中から魚の頭を取出して犬に与えているのであつた。そこへ、もう一人雑魚売りの爺さんが天秤棒(注7)を担いでやって来る。魚芳のおとなしい物腰(注8)に対して、この爺さんの方は威勢のいい商人であつた。そうするとまた露次は賑やかにになり、爺さんの忙しげな庖丁の音や、魚芳の滑らかな声(注9)が暫くつづくのであつた。——こうした、のんびりした情景はほとんど毎日繰返(注10)されていたし、ずっと続いてゆくもののおもわれた。だが、日華事変(注11)の頃から少しずつ變つて行くのであつた。

35 私の家は露次の方から三尺幅(注12)の空地を廻ると、台所に行かれるようになっていたが、そして、台所の前にもやはり三尺幅の空地があつたが、そこへ毎日、八百屋、魚芳をはじめ、いろいろな御用聞(注13)がやって来る。台所の障子一重を隔てた六疊が私の書齋に

なっていたので、御用聞と妻との話すことは手にとるように聞える。私はぼんやりと彼等の会話に耳をかたむけることがあった。ある日も、それは南風が吹き荒んでものを考えるには明るすぎる、散漫な午後であったが、米屋の小僧と魚芳と妻との三人が台所で賑やかに談笑していた。そのうちに彼等の話題は教練のことに移って行った。二人とも青年訓練所へ通っているらしく、その台所前の狭い空地で、魚芳たちは「になえつ」の姿勢を演習して、興じ合っているのであった。二人とも来年入営する筈であったので、兵隊の姿勢を身につけようとして陽気に騒ぎ合っているのだ。その恰好がおかしいので私の妻は笑いこけていた。だが、**B** 何か笑いきれないものが、目に見えないところに残されているようでもあった。台所へ姿を現していた御用聞

のうちでは、八百屋がまず召集され、つづいて雑貨屋の小僧が、これは海軍志願兵になって行ってしまった。それから、豆腐屋の若衆がある日、赤禪(注11)をして、台所に立寄り忙しげに別れを告げて行った。

45 目に見えない憂鬱の影はだんだん濃くなっていたようだ。が、魚芳は相変わらず元気で小豆(こまめ)に立働いた。妻が私の着古しのシャツなどを与えると、大喜びで彼はそんなものも早速身に着けるのであった。朝は暗いうちから市場へ行き、夜は皆が寝静まる時まで板場で働く、そんな内幕も妻に語るようになった。料理の骨が憶えたくて堪らないので、教えを乞うと、親方は庖丁を(注12)使いながら彼の方を見やり、「黙って見ている」と、ただ、そう呟くのだそうだ。鞠躬如(きやうこうじよ)として勤勉に立働く魚芳は、もしかすると、その家の養子にされるのではあるまいか、と私の妻は臆測もした。ある時も魚芳は私の妻に、——あなたとそっくりの写真がありますよ。それが主人のかみさんの妹なのですが、と大発見をしたように告げるのであった。

55 冬になると、魚芳は鴨(ひよどり)を持って来て呉れた。彼の店の裏に畑があつて、そこへ毎朝沢山小鳥が集まるので、釣針(つり)に蚯蚓(みみず)を附けたものを木の枝に吊(つる)しておく、小鳥は簡単に獲れる。餌は前の晩しつらえておくと、霜の朝、小鳥は木の枝に動かなくなっている——この手柄話を妻はひどく面白がったし、私も好きな小鳥が食べられるので喜んだ。すると、魚芳は殆ど毎日小鳥を獲ってはせつせと私のところへ持って来る。夕方になると台所に彼の弾んだ声なきこえるのだった。——この頃が彼にとつては一番愉快かつた時代かもしれない。その後戦地へ赴いた彼に妻が思い出を書いてやると、一帰つて来たたら又幾羽でも鴨鳥(ひよどり)を獲つ



て差上げます」と何かまだ弾む気持をつたえるような返事であった。

翌年春、魚芳は入営し、やがて満洲の方から便りを寄越すようになった。その年の秋から私の妻は発病し療養生活を送るようになったが、妻は枕頭(注13)で女中を指図して慰問の小包を作らせ魚芳に送ったりした。温かそうな毛の帽子を着た軍服姿の写真(注14)が満洲から送って来た。きつと魚芳はみんなに可愛がられているに違いない。炊事も出来るし、あの気性では誰からも(1)重宝(注15)がられるだろう、と妻は時折噂(注16)をした。妻の病気は二年三年と長びいていたが、そのうちに、魚芳は北支(注15)から便りを寄越すようになった。もう程なく除隊になるから帰ったらよろしくお願いする、とあった。魚芳はまた帰って来て魚屋が出来ると思つてい

のかしら……と病妻は心細げに嘆息した。一しきり台所を賑わしていた御用聞きたちの和やかな声ももう聞かれなかつたし、世の中はいよいよ兇悪な貌(注16)を露出している頃であった。千葉名産の蛤(注15)の缶詰を送つてやると、大喜びで、千葉へ帰つて来る日をしたのしみになっている礼状が来た。年の暮、新潟の方から梨の箱が届いた。差出人は川瀬成吉とあった。それから間もなく除隊になつた挨拶状が届いた。魚芳が千葉へ訪れて来たのは、その翌年であつた。

その頃女中を傭(注16)えなかつたので、妻は寝たり起きたりの身体で台所をやつていたが、ある日、台所の裏口へ軍服姿の川瀬成吉がふらりと現れたのだつた。彼はきちんと立つたまま、ニコニコしていた。久振りではあるし、私も頻りに上(注16)つてゆつくりして行けとすすめたのだが、**C** 彼はかしこまつたまま、台所のところの鬨(注16)から一步も内へ這入ろうとしないのであつた。「何になつたの」と、軍隊のことはよく分らない私達が訊ねると、「兵長になりました」と嬉(注16)しげに答え、これからまた魚芳へ行くのだからと、倉皇(注17)として立去つたのである。

そして、それきり彼は訪ねて来なかつた。あれほど千葉へ帰る日をたのしみにしていた彼はそれから間もなく満洲の方へ行つてしまつた。だが、私は彼が千葉を立去る前に街の歯医者でちらとその姿を見たのであつた。恰度私がそこで順番を待つていると、後から入つて来た軍服の青年が歯医者に挨拶をした。「ほう、立派になつたね」と老人の医者は懐しげに背(注16)いた。やがて、私が治療室の方へ行きその椅子に腰を下すと、間もなく、後からやつて来たその青年も助手の方の椅子に腰を下した。「これは仮りにこうしておきますから、また郷里の方でゆつくりお治しなさい」その青年の手当はすぐ終(注16)つたらしく、助手は「川瀬成吉

さんでしたね」と、机のところのカードに彼の名を記入する様子であった。それまで何となく重苦しい気分沈んでいた私はその名をきいて、はっとしたが、その時にはもう彼は階段を降りてゆくところだった。

それから二三カ月して、<sup>(注18)</sup>新京の方から便りが来た。川瀬成吉は満洲の吏員に就職したらしかった。あれほど内地を恋しがって

いた魚芳も、一度帰ってみて、すっかり失望してしまったのであろう。私の妻は日々に募ってゆく生活難を書いてやった。すると満洲から返事が来た。「大根一本が五十銭、内地の暮しは何のことやらわかりません。おそろしいことですな——こんな一節があった。しかしこれが最後の消息であった。その後私の妻の病気は悪化し、もう手紙を認めることも出来なかったが、満洲の方からも音沙汰なかった。

85 その文面によれば、彼は死ぬる一週間前に郷里に辿りついていたのである。「兼て彼の地に於て病を得、五月一日帰郷、五月八日、永眠仕<sup>つかまつりせうろう</sup>候」と、その手紙は悲痛を押つ<sup>おし</sup>ぶすような調子ではあるが、それだけに、佻<sup>わび</sup>しいものの姿が、一そう大きく浮<sup>うか</sup>び上つて来る。

90 あんな気性では皆から可愛がられるだろうと、よく妻は云っていたが、善良なだけに、彼は周囲から過重な仕事を押しつけられ、悪い環境や機構の中を堪え忍んで行つたのではあるまいか。親方から庖丁の使い方は教えて貰えなくても、辛<sup>しんぱう</sup>棒した魚芳、久振りに訪ねて来ても、台所の鬩から奥へは遠慮して這入ろうともしない魚芳。郷里から軍服を着て千葉を訪れ、<sup>(ウ)</sup>晴れがましく顧客の歯医者で手当してもらう青年。そして、遂に病軀<sup>びょうぐ</sup>をかかえ、とぼとぼと遠国から帰つて来る男。……ぎりぎりのところまで堪えて、郷里に死にに還つた男。私は何となしに、また魯迅<sup>(注20)</sup>の作品の暗い翳を思い浮べるのであった。

終戦後、私は郷里にただ死にに帰つて行くらしい疲れはてた青年の姿を再三、汽車の中で見かけることがあった。……

(注)

- 1 彼は早速顔をのぞけ——「彼は早速顔をのぞかせ」の意。
- 2 一里——里は長さの単位。一里は約三・九キロメートル。
- 3 逢遭——出会い。
- 4 露次——ここでは、家と家との間の細い通路。「露地」「路地」などとも表記される。
- 5 日華事変——日中戦争。当時の日本での呼称。
- 6 三尺——尺は長さの単位。一尺は約三〇・三センチメートル。
- 7 御用聞——得意先を回って注文を聞く人。
- 8 教練——軍事上の訓練。
- 9 になえつつ——銃を肩にかけること。また、その姿勢をさせるためにかけた号令でもあった。
- 10 入営——兵務につくため、軍の宿舎に入ること。
- 11 赤禱——ここでは、召集令状を受けて軍隊に行く人がかけた赤いたすき。
- 12 鞠躬如として——身をかがめてかしこまって。
- 13 女中——ここでは、一般家庭に雇われて家事をする女性。当時の呼称。
- 14 写真が満洲から送って来た。——「写真が満洲から送られて来た。」の意。
- 15 北支——中国北部。当時の日本での呼称。
- 16 除隊——現役兵が服務解除とともに予備役(必要に応じて召集される兵役)に編入されて帰郷すること。
- 17 倉皇として——急いで。
- 18 新京——現在の中国吉林省長春市。いわゆる「満洲国」の首都とされた。
- 19 吏員——役所の職員。
- 20 魯迅——中国の作家(一八八一—一九三六)。本文より前の部分で魯迅の作品に関する言及がある。

問1 傍線部(ア)～(ウ)の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選

べ。解答番号は

12

～

14

。

(ア) 興じ合っている

12

- ① 互いに面白がっている
- ② 負けまいと競っている
- ③ それぞれが興奮している
- ④ わけもなくふざけている
- ⑤ 相手とともに練習している

(イ) 重宝がられる

13

- ① 頼みやすく思われ使われる
- ② 親しみを込めて扱われる
- ③ 一目置かれて尊ばれる
- ④ 思いのままに利用される
- ⑤ 価値が低いと見なされる

(ウ) 晴れがましく

14

- ① 何の疑いもなく
- ② 人目を気にしつつ
- ③ 心の底から喜んで
- ④ 誇らしく堂々と
- ⑤ すがすがしい表情で

問2 傍線部A「そうした、暗い、望みのない明け暮れにも、私は凝と蹲ったまま、妻と一緒にすごした月日を回想することが多かった。」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解

答番号は

15

- ① 生命の危機を感じさせる事態が続げさまに起こり恐怖にかられた「私」は、妻との思い出に逃避し安息を感じていた。
- ② 身近な人々の相次ぐ死に打ちのめされた「私」は、やがて妻との生活も思い出せなくなるのではないかとおびえていた。
- ③ 世の中の成り行きに閉塞感を覚えていた「私」は、妻と暮らした記憶によって生活への意欲を取り戻そうとしていた。
- ④ 戦局の悪化に伴って災いが次々に降りかかる状況を顧みず、「私」は亡き妻への思いにとらわれ続けていた。
- ⑤ 思うような連絡すら望めない状況にあっても、「私」は妻を思い出させるかつての交友関係にこだわり続けていた。

問3

傍線部B「何か笑いきれないものが、目に見えないところに残されているようでもあった」とあるが、「私」がこのとき推測した妻の心情はどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

16

- ① 魚芳たちが「になえつつ」を練習する様子に気のはやりがあらわで、そうした態度で軍務につくならば、彼らは生きて帰れないのではと不安がっている。
- ② 皆で明るく振る舞ってはいても、魚芳たちは「になえつつ」の練習をしているのであり、以前の平穏な日々が終わりつつあることを実感している。
- ③ 「になえつつ」の練習をしあう様子に、魚芳たちがいなく期待を感じ取りつつも、商売人として一人前になれなかった境遇にあわれみを覚えている。
- ④ 魚芳たちは熱心に練習してはいるものの、「になえつつ」の姿勢すらうまくできていないため、軍務についたら苦労するのではと懸念している。
- ⑤ 魚芳たちは将来の不安を紛らそうとして、騒ぎながら「になえつつ」の練習をしているのだが、そのふざけ方がやや度を越していると感じている。

問4 傍線部C「彼はかしこまったまま、台所のところの闕から一步も内へ這入ろうとしないのであった」とあるが、魚芳は「私達」に対してどのような態度で接しようとしているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 17。

- ① 戦時色が強まりつつある時期に、連絡せずに「私達」の家を訪問するのは兵長にふさわしくない行動だと気づき、改めて礼儀を重んじようとしている。
- ② 再び魚屋で仕事ができると思つてかつての勤め先に向かう途中に立ち寄ったので、台所から上がれという「私達」の勧めを丁重に断ろうとしている。
- ③ 「私達」に千葉に戻るのを楽しみだと言いつつ、除隊後新潟に帰郷したまま連絡を怠り、すぐに訪れなかったことに対する後ろめたさを隠そうとしている。
- ④ 「私達」と手紙で近況を報告しあっていたが、予想以上に病状が悪化している「妻」の姿を目の当たりにして驚き、これ以上迷惑をかけないようにしている。
- ⑤ 除隊後に軍服姿で「私達」を訪ね、姿勢を正して笑顔で対面しているが、かつて御用聞きと得意先であつた間柄を今でもわきまえようとしている。

問5

本文中には「私」や「妻」あての手紙がいくつか登場する。それぞれの手紙を読むことをきっかけとして、「私」の感情はどのように動いていったか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

18

① 妻の死亡通知に対する悔み状(2行目)を読んで、紋切型の文面からごく少数の知己とさえ妻の死の悲しみを共有しえないことを知った。その後、満洲にいる魚芳から返信が来ないという些細なことが気掛かりになる。やがて魚芳とも悲しみを分かち合えないのではないかと悲観的な気持ちが強まった。

② 川瀬丈吉からの封書(10行目、84行目)を読んで、川瀬成吉が帰郷の一週間後に死亡していたことを知った。生前の魚芳との交流や彼の人柄を思い浮かべ、彼の死にやりきれなさを覚えていく。終戦後、汽車でしばしば見かけた疲弊して帰郷する青年の姿に、短い人生を終えた魚芳が重なって見えた。

③ 満洲から届いた便り(57行目)を読んで、魚芳が入営したことを知った。妻が送った防寒用の毛の帽子をかぶる魚芳の写真が届き(58行目)、新たな環境になじんだ様子を知る。だが、すぐに赴任先が変わったので、周囲に溶け込めず立場が悪くなったのではないかと心配になった。

④ 北支から届いた便り(60行目)を読んで、魚芳がもうすぐ除隊になることを知った。そこには千葉に戻って魚屋で働くことを楽しみにしているから帰ったらよろしくお願いするとあった。この言葉から、時局を顧みない楽天的な傾向が魚芳たちの世代に浸透しているような感覚にとらわれていった。

⑤ 新京から届いた便り(78行目)を読んで、川瀬成吉が満洲の吏員に就職したらしいことを知った。妻が内地での生活難を訴えると、それに対してまるで他人事のように語る返事が届いた。あれほど内地を恋しがっていたのに、役所に勤めた途端に内地への失望感を高めたことに不満を覚えた。



問6 この文章の表現に関する説明として適当でないものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は

19

20

- ① 1行目「魚芳」は川瀬成吉を指し、18行目の「魚芳」は魚屋の名前であることから、川瀬成吉が、彼の働いている店の名前と呼ばれている状況が推定できるように書かれている。
- ② 1行目「私は一九四四年の秋に妻を喪った」、13行目「私が始めて魚芳を見たのは十二年前のことだ」のように、要所で時を示し、いくつかの時点を行き来しつつ記述していることがわかるようにしている。
- ③ 18行目「ブラブラと」、22行目「ニコニコ」、27行目「のそのそと」、90行目「とぼとぼ」と、擬態語を用いて、人物や動物の様子をユーモラスに描いている。
- ④ 28～30行目に記された宿なし犬との関わりや51～56行目の鴨をめぐるエピソードを提示することで、魚芳の人柄を浮き彫りにしている。
- ⑤ 38行目「南風が吹き荒んでものを考えるには明るすぎる」という部分は、「午後」を修飾し、思索に適さない様子を印象的に描写している。
- ⑥ 57行目「私の妻は発病し」、60行目「妻の病気は二年三年と長びいていたが」、62行目「病妻」というように、妻の状況を断片的に示し、「私」の生活が次第に厳しくなっていたことを表している。

### 第3問

次の文章は『小夜衣』の一節である。寂しい山里に祖母の尼上と暮らす姫君の噂を耳にした宮は、そこに通う宰相という女房に、姫君との仲を取り持つてほしいと訴えていた。本文は、偶然その山里を通りかかった宮が、ある庵に目をとめた場面から始まる。これを読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。(配点 50)

「うはいづくぞ」と、御供の人々に問ひ給へば、「雲林院と申す所に侍る」と申すに、御耳とどまりて、宰相が通ふ所にやと、このほどはここにこそ聞きしか、いづくならんと、ゆかしくおほしめして、御車をとどめて見出だし給へるに、いづくもおなじ卯の花とはいひながら、垣根続きも玉川の心地して、ほととぎすの初音も心尽くさぬあたりにやと、ゆかしくおほしめされて、夕暮れのほどなれば、やをら葦垣の隙より、格子などの見ゆるをのぞき給へば、こなたは仏の御前と見えて、閑伽棚ささやかにて、妻戸・格子なども押しやりて、櫛の花青やかに散りて、花奉るとて、からからと鳴るほども、このかたのいとも、この世にてもつれづれならず、後の世はまたいと頼もしきぞかし。このかたは心にとどまることなれば、Aうらやましく見給へり。あぢきなき世に、かくても住まほしく、御目とまりて見え給へるに、童べの姿もあまた見ゆる中に、かの宰相のもとなる童べもあるは、ここにや、とおぼしめせば、御供なる兵衛督といふを召し給ひて、「宰相の君はこれにて侍るにや」と、対面すべきよし聞こえ給へり。驚きて、「いかがし侍るべき。宮の、これまで尋ね入らせ給へるにこそ。かたじけなく侍りとて、いそぎ出でたり。仏のかたはらの南面に、おましなどひきつくりひて、入れ奉る」。

うち笑み給ひて、「このほど尋ね聞こゆれば、このわたりにもし給ふなど聞きて、これまで分け入り侍る心ざし、おぼし知れ」など仰せらるれば、「げに、かたじけなく尋ね入らせ給へる御心ざしこそ、かたはらいたく侍れ。老い人の、限りにわづらひ侍るほどに、見果て侍らんとて、籠もりて」など申すに、「さやうにおはしますらん、不便に侍り。その御心地もうけたまはらんとて、わざと参りぬるを」など仰せらるれば、内へ入りて、「かうかうの仰せ言こそ侍れ」と聞こえ給へば、「さる者ありと御耳に入りて、老いの果てに、かかるめでたき御恵みをうけたまはるこそ、ながらへ侍る命も、今はうれしく、この世の面

目とおぼえ侍れ。B つてならでこそ申すべく侍るに、かく弱々しき心地に「など、たえだえ聞こえたるも、いとあらまほしと聞き給へり。

人々、のぞきて見奉るに、はなやかにさし出でたる夕月夜に、うちふるまひ給へるけはひ、似るものなくめでたし。山の端より月の光のかかやき出でたるやうなる御有様、目もおよばず。艶つやも色もこぼるばかりなる御衣ぎに、直衣なほしはかなくウ重おもなれるあはひも、いづくに加はれるきよらにかあらん、この世の人の染め出だしたるとも見えず、常の色とも見えぬさま、文目あやめもげにめぐらかなり。わろきだに見ならぬ心地なるに、「世にはかかる人もおはしましけり」と、めでまどひあへり。げに、姫君に並べまほしく、C 笑みゐたり。宮は、所の有様など御覽みするに、ほかにはさまかはりて見ゆ。人少なくしめじめとして、ここにもの思はしからん人の住みたらん心細さなど、あはれにおぼしめされて、そぞろにものごなし、御袖もうちしほたれ給ひつつ、宰相にも、「かまへて、かひあるさまに聞こえなし給へ」など語らひて帰り給ふを、人々も名残多くおぼゆ。

(注) 1 雲林院——都の郊外にあった寺。姫君は尼上とともにこの寺の一角にある寂しい庵で暮らしている。

2 玉川の心地して——卯の花の名所である玉川を見るような心地がして。

3 閨伽棚——仏前に供える水や花などを置くための棚。

4 妻戸——出入り口に付ける両開きの板戸。

5 櫛——仏前に供えられることの多い植物。

6 老い人——ここでは、尼上を指す。

問1

傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

21

23

(ア) ゆかしくおぼしめして

21

- ⑤ いぶかしくお思いになって
- ④ もどかしくお思い申し上げて
- ③ 知りたくお思いになって
- ② 縁起が悪いとお思いになって
- ① 会いたいとお思い申し上げて

(イ)

22

- ⑤ やをら
- ④ 静かに
- ③ 急いで
- ② かろうじて
- ① まじまじと
- ⑤ そのまま

(ウ)

23

- ⑤ 重なる様子
- ④ 重ねた風情
- ③ 重なった瞬間
- ② 重なっている色合い
- ① 重ねている着こなし

問2

波線部 a ～ d の敬語は、それぞれ誰に対する敬意を示しているか。その組合せとして正しいものを、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選べ。解答番号は

24

- |    |    |    |    |    |
|----|----|----|----|----|
| ⑤  | ④  | ③  | ②  | ①  |
| a  | a  | a  | a  | a  |
| 宰相 | 宰相 | 宮  | 宮  | 宮  |
| b  | b  | b  | b  | b  |
| 宰相 | 宮  | 宮  | 宰相 | 宰相 |
| c  | c  | c  | c  | c  |
| 老人 | 老人 | 宮  | 老人 | 宮  |
| d  | d  | d  | d  | d  |
| 老人 | 宮  | 老人 | 宮  | 老人 |

問3 傍線部A「うらやましく見給へり」とあるが、宮は何に對してうらやましく思っているか。その説明として最も適當なもの

を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 25。

- ① 味気ない俗世から離れ、極樂浄土のように楽しく暮らすことのできるこの山里の日常をうらやましく思っている。
- ② 姫君と来世までも添い遂げようと心に決めているので、いつも姫君のそばにいる人たちをうらやましく思っている。
- ③ 仏事にいそしむことで現世でも充実感があり来世にも希望が持てる、この庵での生活をうらやましく思っている。
- ④ 鳥の鳴き声や美しい花に囲まれた庵で、来世のことを考えずに暮らすことのできる姫君をうらやましく思っている。
- ⑤ 自由に行動できない身分である自分と異なり、いつでも山里を訪れることのできる宰相をうらやましく思っている。

問4 傍線部B「つてならでこそ申すべく侍るに」とあるが、尼上はどのような思いからこのように述べたのか。その説明として

最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 26。

- ① 病気のためになわなないが、本来であれば直接自分が姫君と宮との仲を取り持つて、二人をお引き合わせ申し上げるべきだ、という思い。
- ② 長生きしたおかげで、幸いにも高貴な宮の来訪を受ける機会に恵まれたので、この折に姫君のことを直接ご相談申し上げたい、という思い。
- ③ 老いの身で宮から多大な援助をいただけることはもったいないことなので、宰相を介さず直接お受け取り申し上げるべきだ、という思い。
- ④ 今のような弱々しい状態ではなく、元気なうちに宮にお目にかかって、仏道について直接お教え申し上げたかった、という思い。
- ⑤ 宮が自分のような者を氣にとめて見舞いに来られたことは実に畏れ多いことであり、直接ご挨拶申し上げるべきだ、という思い。

問5 傍線部C「笑みゐたり」とあるが、この時の女房たちの心情についての説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

解答番号は 27。

- ① 普段から上質な衣装は見慣れているが宮の衣装の美しさには感心し、姫君の衣装と比べてみたいと興奮している。
- ② 月光に照らされた宮の美しさを目の当たりにし、姫君と宮が結婚したらどんなにすばらしいだろうと期待している。
- ③ 宮が噂以上の美しさであったことに圧倒され、姫君が宮を見たらきつと驚くだろうと想像して心おどらせている。
- ④ 山里の生活を宮に見せることで仏道に導き、姫君とそろって出家するように仕向けることができたと喜んでいいる。
- ⑤ これまで平凡な男とさえ縁談がなかった姫君と、このようなすばらしい宮が釣り合うはずがないとあきれている。



問6

この文章の内容に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

28

- ① 宮は山里の庵を訪ねた折、葦垣のすきまから仏事にいそしむ美しい女性の姿を見た。この人こそ噂に聞いていた姫君に違いないと確信した宮は、すぐに対面の場を設けるよう宰相に依頼した。
- ② 宮の突然の来訪に驚いた宰相は、兵衛督を呼んで、どのように対応すればよいか尋ねた。そして大急ぎで出迎えて、宮に失礼のないように席などを整え、尼上と姫君がいる南向きの部屋に案内した。
- ③ 重篤の身である尼上は、宰相を通じて自分の亡き後のことを宮に頼んだ。姫君についても大切に後見するよう懇願された宮は、姫君との関係が自らの望む方向に進んでいきそうな予感を覚えた。
- ④ 宮の美しさはあたかも山里を照らす月のようで、周囲の女房たちは、これまでに見たことがないほどだと驚嘆した。一方宮はこの静かな山里で出家し、姫君とともに暮らしたいと思うようになった。
- ⑤ 宮は山里を去るにあたり、このような寂しい場所で暮らしている姫君に同情し、必ず姫君に引き合わせてほしいと宰相に言い残した。女房たちは宮のすばらしさを思い、その余韻にひたっていた。

第4問

次に挙げるのは、六朝時代の詩人謝靈運しゃれいゆんの五言詩である。名門貴族の出身でありながら、都で志を果たせなかった彼は、疲れた心身を癒やすため故郷に帰り、自分が暮らす住居を建てた。これはその住居の様子を詠んだ詩である。これを読んで、後の問い(問1〜6)に答えよ。なお、設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところがある。(配点 50)

樵(注1)隱(ア)俱(イ)在(ル)山(モ) 由(注2)来(ニ)事(ハ)不(シ)同(ク)

不(ハ)同(ニ)非(ズ)一(ト)事(ヲ) 養(注3)痾(フ)亦(タ)園(注4)中(ニ)

園(ニ)中(ニ)屏(注5)氛(フ)雜(ク) 清(注6)曠(ク)招(ク)遠(ク)風(ヲ)

ト(注7)室(ヲ)倚(ヨ)北(ノ)阜(ニ) 啓(ヒ)扉(ヲ)面(ス)南(ノ)江(カ)

激(注8)澗(ニ)代(ヘ)汲(ク)井(ニ) 挿(ウ)榿(ヲ)当(ツ)列(レ)墉(ニ)

群(ニ)木(ヲ)既(ニ)羅(フ)戸(ニ) 衆(ニ)山(ヲ)亦(タ)对(ス) **C**

靡(注9)迤(ト)趨(ニ)下(ニ)田(ニ) 迢(注10)遙(ト)瞰(ミ)高(ク)峰(ヲ)

寡(注11)欲(ヲ)不(レ)期(セ)勞(ヲ) 即(シ)事(ニ)罕(注12)人(ノ)功(ニ)

唯ダ開キ蔣しやう生せい徑みち一  
永ウ懷おも求きう羊やう蹤あと一

E  
賞(注13)心不カラ可ル忘  
妙(注14)善こひねが冀ハクハ能よ同ともニセン

(注) 1 樵隱——木こりと隱者。

2 由来——理由。

3 養レ痾——都の生活で疲れた心身を癒やす。

4 園中——庭園のある住居。

5 氛雜——俗世のわずらわしさ。

6 清曠——清らかで広々とした空間。

7 卜レ室——土地の吉凶を占つて住居を建てる場所を決めること。

8 靡迤——うねうねと連なり続くさま。

9 迢通——はるか遠いさま。

10 罕ニ人功——人の手をかけ過ぎない。

11 蔣生——漢の蔣詡のこと。自宅の庭に小道を作つて友人たちを招いた。

12 求羊——求仲と羊仲のこと。二人は蔣詡の親友であつた。

13 賞心——美しい風景をめぐる心。

14 妙善——この上ない幸福。

『文選』による

問1 波線部(ア)「俱」・(イ)「寡」のここでの読み方として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ

選べ。解答番号は

29

30

(ア) 「俱」

29

- ⑤ たまたま  
④ つぶさに  
③ すでに  
② そぞろに  
⑤ ともに

(イ) 「寡」

30

- ⑤ いつはりて  
④ つのりて  
③ すくなくして  
④ がへんじて  
⑤ あづけて

問2 傍線部A「由来事不同、不同非一事」について、(a)返り点の付け方と、(b)書き下し文との組合せとして最も適当な

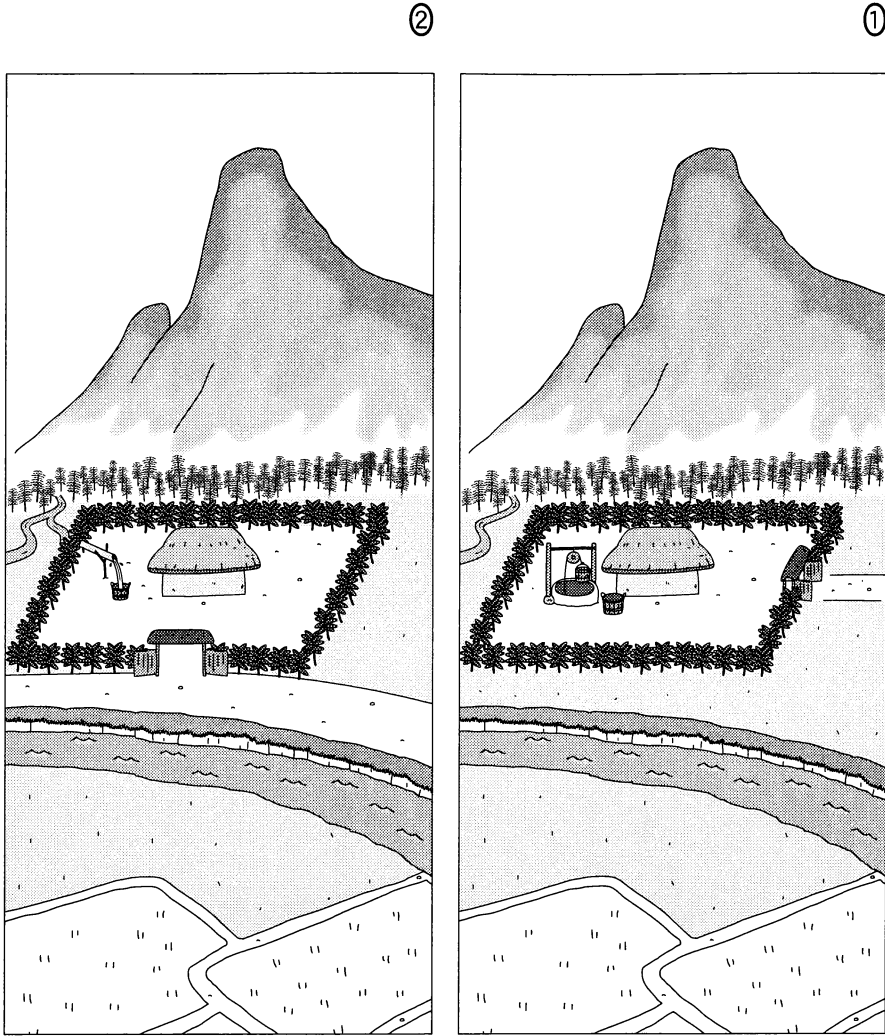
ものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

31。

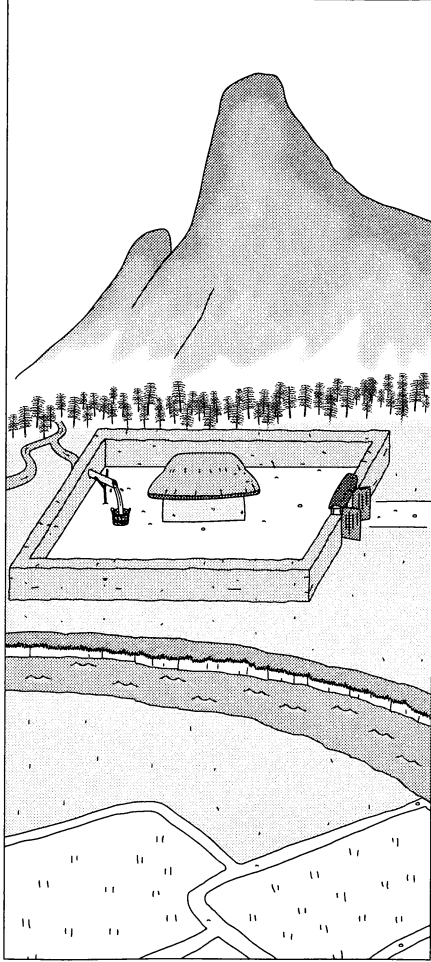
- |   |     |             |     |                          |
|---|-----|-------------|-----|--------------------------|
| ① | (a) | 由来事不同、不同非一事 | (b) | 由来事は同じからず、一事を非とするを同じうせず  |
| ② | (a) | 由来事不同、不同非一事 | (b) | 由来事は同じからず、同じからざるは一事に非ず   |
| ③ | (a) | 由来事不同、不同非一事 | (b) | 由来事は同じうせず、一に非ざる事を同じうせず   |
| ④ | (a) | 由来事不同、不同非一事 | (b) | 由来事は同じうせず、非を同じうせずんば事を一にす |
| ⑤ | (a) | 由来事不同、不同非一事 | (b) | 由来事は同じうせず、非とするは一事に同じからず  |

問3 傍線部B「ト室倚北阜、啓扉面南江、激澗代汲井、挿槿当列墉」を模式的に示したとき、住居の設備と周  
 辺の景物の配置として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

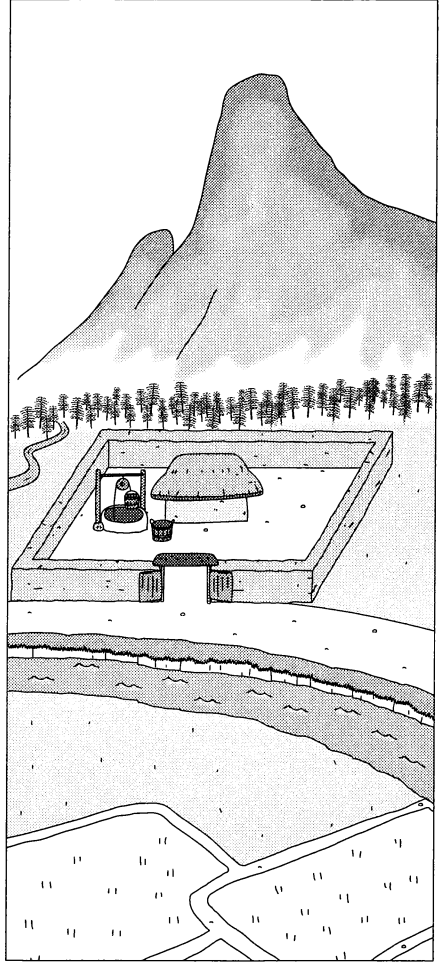
32。



④



③



問  
4

空欄

**C**

に入る文字として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

**33**

⑤ ④ ③ ② ①

月 門 虹 空 窓



問5 傍線部D「靡<sub>び</sub>迤<sub>い</sub>趨<sub>く</sub>下<sub>下</sub>田<sub>田</sub>」  
「迢<sub>と</sub>遙<sub>遙</sub>瞰<sub>み</sub>高<sub>高</sub>峰<sub>峰</sub>」の表現に関する説明として適当でないものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 34。

- ① 「靡<sub>び</sub>迤<sub>い</sub>」という音の響きの近い語の連続が、「下<sub>下</sub>田<sub>田</sub>に趨<sub>く</sub>」という動作とつながることによって、山のふもとの田園風景がどこまでも続いていることが強調されている。
- ② 「靡<sub>び</sub>迤<sub>い</sub>として」続いている田園風景と「迢<sub>と</sub>遙<sub>遙</sub>として」はるか遠くに見える山々が対句として構成されることによって、住居の周辺が俗世を離れた清らかな場所であることが表現されている。
- ③ 「迢<sub>と</sub>遙<sub>遙</sub>」という音の響きの近い語の連続が、「高<sub>高</sub>峰<sub>峰</sub>を瞰<sub>み</sub>」という動作とつながることによって、山々がはるか遠くのすがすがしい存在であることが強調されている。
- ④ 山のふもとに広がる「下<sub>下</sub>田<sub>田</sub>」とはるか遠くの「高<sub>高</sub>峰<sub>峰</sub>」が対句として構成されることによって、この詩の風景が、垂直方向だけでなく水平方向にもびやかに表現されている。
- ⑤ 「趨<sub>く</sub>」と「瞰<sub>み</sub>」という二つの動詞が対句として構成されることによって、田畑を耕作する世俗のいなみが、作者にとって高い山々をながめやるように遠いものとなったことが強調されている。

問 6

傍線部E「賞心不可忘、妙善冀能同」とあるが、作者がこの詩の結びに込めた心情はどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

35

- ① 美しい風景も、漢の蔣生と求仲・羊仲のように、親しい仲間と一緒にながめると、さまざまな見方を教わることがあるので、立派な人格者である我が友人たちよ、どうか遠慮なく何でも言ってください。
- ② 美しい風景は、漢の蔣生と求仲・羊仲のように、親しい仲間と一緒にながめても、その評価は決して一致しないので、立派な人格者である我が友人たちよ、どうか私のことはそっとしておいてください。
- ③ 美しい風景は、漢の蔣生と求仲・羊仲のように、親しい仲間と一緒にながめてこそ、その苦心が報われるもので、立派な人格者である我が友人たちよ、どうか我が家のことを皆に伝えてください。
- ④ 美しい風景は、漢の蔣生と求仲・羊仲のように、親しい仲間と一緒にながめてこそ、その楽しさがしみじみと味わえるものなので、立派な人格者である我が友人たちよ、どうか我が家においでください。
- ⑤ 美しい風景も、漢の蔣生と求仲・羊仲のように、親しい仲間と一緒にながめないと、永遠に称賛されることはないので、立派な人格者である我が友人たちよ、どうか我が家を時々思い出してください。